



上) 仕事場で撮影機材のはんだ付けをする宮崎氏 下) 森でロボットカメラの撮影データを確認

宮崎さんの写真からは、そうした楽しさに加えて、カモシカやフクロウなど、あらゆる被写体への並外れた探究心が伝わってくるように思います。

**宮崎** フクロウはもう50年近く撮り続けてきましたが、30代の頃は年間200日も山に籠もるほど没頭しました。長野県上伊那郡の谷あいにはベニヤ板の観察小屋を建て

て、絵コンテを描いては撮影してましたね。

フクロウは漢字で「梟」と書くとお、立ち木にとまる鳥で、地上の獲物を狙って、木の上で何時間も待ち伏せするんです。この習性を利用すれば、まさに漢字のようなフクロウらしい写真が撮れると思うって、大きな枯木を運び込み、谷底に立てました。するとその晩のうちに、フクロウがとまってくれたんです。

それから、赤外線センサーを設置してフクロウがどの木にとまったか、小屋の中からもわかるようにしたり、複数のロボットカメラを小屋からスイッチで操作できるようにしたりと、技術的なこともこの頃にずいぶん進歩しましたね。

フクロウのほうも僕が安全な奴

伊東 これまで半世紀もの間、宮崎さんが自作のロボットカメラを駆使して撮影された野生動物たちの姿は、近くに人間がいては決して撮れないものばかりですね。ご自身の集大成ともいえる展示作品を改めてご覧になられて、いかがでしょうか？

**宮崎** 50年もよくやってきたなと自分でも思いますが、やっぱり現場に立って、誰も見たことのない世界を撮るのが、楽しくて仕方がないんですね。今回の展覧会を見ながら、まだまだやっておきたいことがたくさんあるなど、燃えてきました。

**伊東** 宮崎さんの写真は、雑誌『アニマ』(平凡社・1973〜1993年刊行)で特集されていた頃から興味深く拝見していました。好きで好きでたまらないという気持ちや、撮りたいイメージへの執念のようなものがひしひしと伝わってくる作品ばかりです。

野生動物のありのままの姿を撮るには、ロボットカメラなどの複雑な機材を扱う技術もさることながら、やはり動物の習性を知り尽くした、研究者のような観察眼も欠かせないのではないかと思います。

だとなかると、近くまで寄っても逃げなくなつて、ずいぶん仲良しになれましたよ。

**伊東** 宮崎さんの手にかかる、山の中がまるで撮影スタジオのような空間になってしまふ。さらに長期にわたって定点で撮影を続けることで、見えてくる世界があるのですね。

**宮崎** そうなんです。もともとその谷は棚田だったので、フクロウたちは主にカエルを捕食していました。しかし70年代以降の減反政策によって耕作が放棄されると、田んぼからカエルが減つて、ネズミがどんどん増えてくる。するとフクロウはネズミを食べるようになって、その数が維持される。一方、ネズミは地表付近の植物の根などを食べながら動き回ることで、よって、土中に酸素が送られて、森の自然が更新されてゆく。そんなふうには自然界は、絶えず関わり合いながら、微妙なバランスが調整されているんですね。

ですから僕はフクロウだけではない、フクロウの背景で起きている「コト」や、人間社会との見えないつながりが浮かび上がってくるような写真を撮りたいと思ってきました。黙して語らない自然が、長

伊東 なるほど、私たち写真を見る立場からすれば、写真に込められた言葉を、どれだけ読み取ることができるか。受け手側としても、改めてそういう写真の見方を心がけたいと思います。

フクロウが枝にとまる瞬間  
(フクロウ)1982-88年より

い時間軸で見てゆくと、じつは色々なことを語っている。その語りを僕は、視覚言語として写真に残しておきたいんです。ただ、それは説明的なものではなく、俳句の五・七・五のように、余分なものを引き算して、どれだけ語りたことを込められるか。そこが重要なんです。



東京都写真美術館  
写真展「宮崎 学 イマドキの野生動物」  
記念対談

# 語らぬ自然が語りだす

写真家 **宮崎 学**  
みやざき まなぶ  
1949年長野県生まれ。地元の伊那谷を中心に自然と人間をテーマに社会的視点に立った「自然界の報道写真家」として活動。自作の自動撮影カメラを駆使し、独自の分野を開拓する。写真集、著書多数。

東京都写真美術館 館長 **伊東 信一郎**  
いとう しんいちろう  
1950年宮崎県生まれ。74年九州大学卒業後、全日本空輸に入社。同社社長室事業計画部長、人事部長などを経て、2009年代表取締役社長に就任。現在、ANAホールディングス取締役会長。16年4月より東京都写真美術館第5代館長に就任。

## 柿の木とクマ

**伊東** これまでの数々の著書や写真集を改めて拝見したのですが、『柿の木』（偕成社）を直近で読みまして、たいへん感動しました。長期にわたって、山の上に立つ一本の柿の木を同じアングルで撮り続けている。同じ柿の木の下に、村の人や野生動物が時おり訪れて、木登りをしたり柿の実を食べたりする。物言わぬ柿の木が見てきたであろう、村の暮らしや時代の変遷までもが浮かび上がってくるようで、まさに「黙して語らぬ自然」が語り出す作品だと思いました。

**宮崎** 昔は柿の木は、どこの地域にもありましたから、それを撮ることで、人間社会も見えてくるの



ではないかと思いました。柿の木の前に撮影小屋を建ててカメラを固定して、ファインダーの中に地形や木の輪郭をマジックで描き込んで、構図を全く変えずに写真を撮りました。

時代と共に電力が行き届いて、夜の景色が明るくなってゆくというのも、撮影テーマのひとつでした。柿の木の近くに住んでいた100歳くらいのおばあちゃんの話や、話を聞くと、10歳くらいの頃には話や村に電気が来た。それまでは夜は本当に真っ暗だったそうです。

**伊東** 私の田舎でも、いまだに夜



『柿の木』宮崎学（偕成社・2006年）

は漆黒の間になるのでよくわかりません。都会で育った人が遊びに来ると、あの暗闇の中では一歩も動けなくなってしまう。

**宮崎** 小学生くらいまでの幼児体験の差というのは大きいでしょうね。最近では、柿の木に登って実を取る子供たちの姿も、ほとんど見なくなりました。柿の木は、登られて表皮が剥けたり枝が折れたりすることで木が活性化されて、たくさん実を付けるんですけどね。

じつは、クマもその特徴をよく知っていて、柿の木のように折った方がいい木だけは、登ってバキバキ枝を折る。そうやってたくさん実った柿の実を、人もクマも食べてきたわけです。

**伊東** 同じ柿の木をめぐって、人間とクマが間接的につながっている。こうした関係性は、まさに宮崎さんの言われる「シナントロップ」ですね。人間側の変化に伴って、クマが食べるものが変わるということもあるのでしょうか？

**宮崎** それは大いにありますよ。昔はこの村にもあった柿の木が今はなくなってきましたから、代わりにクルミの木にシフトしています。新潟県の信濃川沿いなど、大きなクルミ林も増えていま

てもらえればと思っています。

**伊東** 森ではシカの死肉はキツネが食べて、毛は鳥が巣材としてついで、骨はタヌキが持ち去る。森であまり動物の死体を見かけないのは、こうしたリサイクルが絶えず行われているからなんです。

**宮崎** はい。常に変化しながら、自然のバランスが調整されているんです。ここ数年は、そのリサイクルの場面に、クマが多く写るようになりました。

先ほど、クマが増えているという話になりましたが、その原因のひとつに、全国でシカが爆発的に増えているということがあります。毎年たくさん生まれた分だけ、寿命が来れば、死体の数も増えることになる。すると、それを食べる肉食系のクマも、自ずと数を増やすわけです。

**伊東** なるほど、長年にわたって現場で生や死を見つめ続けてきた宮崎さんならではの、実感に根ざした視点ですね。

**宮崎** さらに言えば、シカが増えているのは、冬場に道路の凍結防止用に撒かれる塩化カルシウムにも原因があると考えています。山の中には滅多に塩分がありませんから、動物たちからすれば格好の



すからね。僕はここ10年くらい、いくつか近場のクルミの木の下にカメラを仕掛けていますが、この木にもたくさんクマが来ています。

**伊東** それだけ身近な場所にも、クマが来ているのですね。最近では全国でクマの事故が増えているというニュースもよく見られます。本展の「けもの道」シリーズでは、人間の親子連れとクマの親子連れが、時間こそ違えど、まったく同じ山道を使っている写真が印象的でした。

**宮崎** 動物だって、山の一番歩きやすいところを歩きますからね。むしろ大半の山道は、もともとけもの道だったところを人間が広げて使っています。数ヶ先の茂みに

ミネラル源です。実際にシカの群れが、雪解けの道路脇を舐めている場面を度々撮影しました。そうしてシカの健康状態はよくなり、生息数を増やしている。そこには人間社会の営みが、無意識・間接的に影響しているんです。

**伊東** 私たちの身の回りには、そうした見えないつながりが、まだまだあるのでしようね。自分の地域を見つめ直す上でも、今回の展示にはさまざまなヒントがあるのではと思います。

**宮崎** この写真展にはたくさんテーマを込めています。クマといえばハチミツやプーさんくらいしかイメージのない人も、シカの死体に食らいつく写真を見て、「えーっ！」と驚く。そんなふうにとつても、何かを感じ取ってくれたら嬉しいですね。

自然界では人間社会も含めて、すべてが見えないところで繋がっています。時代とともに変化するイマドキの野生動物の姿を通じて、これからも発信を続けていきたいです。

**伊東** ありがとうございます。今回の展覧会が、1人でも多くの方の、何かのきっかけになれば幸いです。



二ホンジカの腸を引きずり出すツキノワグマ（死を食へる）2012-16年より

は、クマが隠れていると思った方がいい。クマは物音を立てない名人ですから、茂みにいればガサガサ音がするというのは大間違いです。鉢合わせになってクマを驚かせるのが一番危ないので、こちらが存在を早めに知らせておく必要があります。だから僕は森に入るとき、車から一歩踏み出したら「ホイ」って大声を上げるんです。ここに人が来たぞって、クマが逃げる余裕を作ってあげる。熊鈴なんかよりも、木を叩く音や声など、自然に近い音の方がクマは敏感に察知します。

**伊東** 私も昔は、溪流釣りなどで

山を歩いたものですが、2回ほどクマの後姿を見たことがあります。とくに溪流では、鈴の音は聞こえにくいようですね。

## リサイクルされる「死」

**伊東** 今回、展覧会の来場者にアンケートを行ったところ、出品作品のなかで、とくに「死」のシリーズへの関心が高かったようです。森にある動物の死体を定点で撮影された写真には、じつに様々な生き物によって、死体が跡形もなく分解されていく様子が記録されています。現場では臭いなど大変なご苦労もあったと思いますが、どんな想いで撮られたのでしょうか？

**宮崎** このテーマは30年くらい撮り続けてきました。現代では死を身近に感じる機会がほとんどなくなり、写真の世界でも、きれいな写真、というテーマばかり注目が集まります。でもそれは偏っていると思うんです。人間は誰でもいつか死ぬし、昔から仏教の「九相図」に描かれている通り、どんな人でも、死んだら野良犬やカラスに肉を食われて、無数のウジに分解されていく。そういう普遍的な死の側面を、森の動物の死体を通して、現代人に知っ